

2021年3月11日発行

**小規模単科大学附属図書館における未貸出図書の特徴：
単年度の館外貸出データを基に**

金 井 喜一郎

相模女子大学紀要 VOL.84 (2020年度)

小規模単科大学附属図書館における未貸出図書の特徴： 単年度の館外貸出データを基に

金 井 喜一郎

Characteristics of Unborrowed Books in a Small College Library: Based on circulation data in a single year

Kiichiro KANAI

Abstract

Although several studies have analyzed unborrowed books in large university libraries, none have focused on small college libraries. This study aims to investigate the characteristics of unborrowed books in a small college library by analyzing its circulation data. The 2017 data of 1,365 books registered in 2016 by the Library of S College, a college of music, were surveyed. The results of the survey show that the overall unborrowed rate is consistent with that of previous studies. Conversely, when examining each subject area, based on the Nippon Decimal Classification (NDC), the variation between subject areas was found to be greater than that of previous studies. The four highest unborrowed rates concerned the following subject areas: philosophy, history, technology, and industry; with unborrowed rates ranging from 91.7% to 95.2%. Additionally, the unborrowed books were not directly related to music or to the classes in which the students were enrolled, and ill-suited for the users' age group. The characteristics of the unborrowed books in the Library of S College can be generalized, to some extent.

Key Words : university library, college library, unborrowed books, circulation data, music

1. 研究の背景と目的

わが国の大学図書館（短期大学を除く）の状況について、統計情報¹を元に、直近である2019年度と15年前の2004年度とを比較すると、奉仕対象者は2004年度の6,474千人から2019年度の7,028千人へと約9%増えている。一方で資料費は、7,086,652万円から6,472,266万円へと約9%減少している。このうち図書費に限ってみれば、2,939,499万円から1,538,792万円へとおよそ半減している。これは、資料費総額が増えない中で、電子ジャーナル等の費用が大幅に増えたことが主要要因だと考えられる。このような状況において、大学図書館は、より効率的かつ効果的に図書館サービスを提供することが求められていると言えよう。

図書館サービスの効果を測る1つの方法として、館外貸出データの分析がある。館外貸出は、図書館における中心的な利用者サービスであり、館内利用との相関関係も認められている²。よってその状況を把握することで、図書館サービス全体の効果を推測することが可能である。

また、館外貸出データを基に貸出頻度分布や経年的変化を分析することによって、図書の別置や廃棄の判断材料を得ることができる。書架の狭隘化は大きな問題であり、これに対処する必要があるだけでなく、利用されなくなった図書を処分して書架を新鮮に保つことは利用者サービスの質の向上に欠かせない。特に、受入から一度も貸し出されることが無かった図書（本稿ではこれを「未貸出図書」と呼ぶ）については、別置や廃棄の候補となるだけでなく、選書を見直すきっかけにもなり得る。

大学図書館における未貸出図書の分析は、次章で述べるようにいくつか存在し、そこでは大規模な総合大学の附属図書館が分析の対象となっている。確かに、大規模な総合大学の附属図書館は、データの偏りが少ないことが期待できるので、分析の対象としてふさわしい。

これに対し、小規模な単科大学の附属図書館では、大規模な総合大学の附属図書館とは状況が異なる可能性がある。わが国における単科大学の数は288校で、これは大学全体（短期大学を除く）786校の約37%を占める³。これだけの数の単科大学が存在することを考えれば、単科大学の状況を調査・分析することには十分な意義があると思われる。そこで本稿では、小規模単科大学の附属図書館における図書の館外貸出データを分析し、特に未貸出図書につい

て、その特徴を明らかにする。今回は、受入年度の翌年度の貸出状況のみを調査することとし、経年的変化は考慮しない。

なお本稿では、一定期間のみ貸し出されることが無かった図書に関しては、「未貸出図書」と区別するために、「貸し出されなかった図書」などと呼ぶこととする。

2. 先行研究

大学図書館における館外貸出の冊数（回数）や割合等に関する先行研究は散見される⁴が、未貸出図書を分析したものは限られる。後者については、例えば、鬼頭ら⁵や岸田ら⁶などがある。

鬼頭ら⁵は、書架の収容能力が限界に達した際に、倉庫へ移すべき資料を合理的に選択することが調査の動機となっている。図書館開設（大学開校）から調査時点までの約30年間に受け入れた蔵書の中から、貸出可能な開架図書約16万冊を対象に、個々の図書の貸出カードを手作業により確認することで未貸出図書を判断した。調査時点での未貸出図書数を受入年度別に集計し、その後3年間の経年的変化を分析している。

これに対し岸田ら⁶は、図書館サービスの維持・向上のためにサービスの効果を的確に把握する1つの方法として館外貸出データの分析を行った。対象としたのは、2つの大学図書館（A大学とB大学）であり、開架されている貸出可能な和書の6年分および4年分の貸出データを基に、経年的変化や貸出頻度分布を分析した。貸出頻度分布とは、一定期間における貸出回数ごとの冊数の分布を表すものであり、これにより、期間内に非常に頻繁に貸し出されている図書や、一度も貸し出されていない図書の冊数を捉えることができる。岸田ら⁶は、ある特定年度に受け入れた図書を対象に、翌年度から数年間の貸出頻度分布の経年的変化を分析した。ここでは、未貸出図書⁷の割合の経年的変化も分析されている。

以上2つの先行研究が対象とした図書館はいずれも大規模な総合大学⁸の附属図書館であり、調査時点の年間貸出件数（回数）はおよそ8万から10万程度である。

3. 調査方法

3. 1. 調査対象

本稿の調査対象は、芸術系（音楽）の単科大学で

あるS大学の附属図書館である。S大学は短期大学を併設しており、附属図書館を共有している。学生数は併設校と合わせて1,500名ほどである。蔵書数は、2016年3月末現在で約162,000冊となっているが、うち図書数は59,500冊のみである。一方、楽譜51,400冊、視聴覚資料46,700タイトルを所蔵しており、図書以外の資料を重点的に収集している点が大きな特色である。

図書、楽譜、視聴覚の各資料の中で、館外貸出が可能なのは、図書と楽譜である⁹。ただし、楽譜については、貸出期間が2週間の「普通貸出」のほかに、当日中に返却しなければならない「当日貸出」がある。これは、楽譜が原則として閉架式であるため、館内で閲覧するためにも貸出処理をしなければならないからであるが、それ以外にも授業（実技レッスン等）や学内での練習に使用するための貸出も少なくないと思われる。また、普通貸出に関しても、楽譜の場合は、図書のように「読む」だけでなく、演奏（練習）に「使う」ことも多い。このように図書と利用の目的や方法が異なり、先行研究との比較が困難なため、楽譜は調査の対象とはしない。よって本稿が調査の対象とするのは、図書の館外貸出データのみである。

3. 2. 調査方法

S大学附属図書館における図書の館外貸出データを分析し、特に未貸出図書に注目してその特徴や先行研究との違いを明らかにする。館外貸出については、経年的に頻度が減少する傾向が先行研究におい

て示されているが、今回の調査ではこの傾向を考慮しないため、受入後間もない図書のみを調査の対象とする。具体的には、ある年度（2016年度）に受け入れた図書の翌年度（2017年度）の館外貸出データを調査に用いる。

S大学附属図書館の2016年度（2016年4月1日から2017年3月31日）の図書の受入冊数は、1,442冊であった¹⁰が、ここには閉架図書55冊が含まれている。S大学附属図書館では、和書は原則として開架とし、洋書は専門書（音楽書）以外を閉架としている。このため閉架図書の館外貸出は開架図書に比べて極端に少ない¹¹。また、全体に占める割合も低い（3.8%）ことから、今回の調査対象からは外すこととした。さらに、館外貸出が制限されている22冊（参考図書21冊、リザーブブック1冊）を除いた結果、1,365冊が調査の対象となった。

4. 結果

4. 1. 貸出の有無

調査対象とした1,365冊について、2017年度（2017年4月1日から2018年3月31日）における貸出の有無を示したものが第1表である。全体的に見ると、この期間に1回以上貸し出された図書は372冊（27.3%）であり、一度も貸し出されなかった図書は993冊（72.7%）であった。なお、1,365冊の中には洋書が88冊含まれており、このうち貸出があった図書は14冊で、洋書全体に占める割合は15.9%であった。

第1表 貸出の有無

	NDC第1次区分											合計
	0 (総記)	1 (哲学)	2 (歴史)	3 (社会科学)	4 (自然科学)	5 (技術)	6 (産業)	7 (芸術)		8 (言語)	9 (文学)	
								76 (音楽)	76以外			
貸出あり	12	3	8	39	12	3	2	208	40	13	32	372
貸出なし	43	33	143	226	13	60	29	164	215	7	60	993
合計	55	36	151	265	25	63	31	372	255	20	92	1,365
貸出率	21.8%	8.3%	5.3%	14.7%	48.0%	4.8%	6.5%	55.9%	15.7%	65.0%	34.8%	27.3%
未貸出率	78.2%	91.7%	94.7%	85.3%	52.0%	95.2%	93.5%	44.1%	84.3%	35.0%	65.2%	72.7%

※ 「貸出率」は、主題（NDCの区分）ごとの合計冊数に占める「貸出あり」冊数の割合を表す。

※ 「未貸出率」は、主題（NDCの区分）ごとの合計冊数に占める「貸出なし」冊数の割合を表す。

次にNDC（日本十進分類法）の第1次区分により主題ごとの貸出状況を確認する。ただし、7（芸術）については、S大学の教育・研究領域（専門分野）である音楽分野の状況を確認するため、第2次区分「76（音楽）」までを示している。76（音楽）は、当然のことながら受入冊数が多い（372冊）ため、貸出冊数も208冊と多いが、貸出率も55.9%と高い。貸出率が76（音楽）よりも高いものとしては、8（言語）の65.0%があるが、受入冊数が20冊しかないため、貸し出されたのは13冊のみであり、76（音楽）との単純な比較はできないであろう。それでもなお、8（言語）の貸出率が高いことには変わりはない。その他の貸出冊数が多い主題分野を見ると、3（社会科学）が39冊、76以外（音楽以外の芸術）が40冊となっている。しかしながら、これらは受入冊数が多い（それぞれ265冊と255冊）ことが影響したためであり、貸出率を見るならば、3（社会科学）は14.7%、76以外（音楽以外の芸術）は15.7%と、他の主題と比べて特に高いとは言えない。これに対し、4（自然科学）は受入冊数が25冊と少ないため貸出冊数も12冊しかないが、その貸出率は76（音楽）に次ぐ48.0%である。

4. 2. 貸出回数（合計）

前節では、貸出の有無についてその冊数と割合（貸出率）に着目したが、本節では貸出回数に着目する。第2表は、主題分野ごとの貸出回数（合計）を表している。

まず、主題分野間で貸出回数を比較すると、当然のことながら76（音楽）が649回と突出しており、全貸出回数939回の69.1%を占めている。76（音楽）に続くのが76以外（音楽以外の芸術）の64回、3（社会科学）の63回で、76（音楽）の10分の1を下回っている。第1表で分かるように、貸出冊数で見れば5分の1程度なので、76（音楽）は、3（社会科学）や76以外（音楽以外の芸術）に比べて1冊あたりの平均貸出回数が2倍程度あることが分かる。そこで、各主題の1冊あたりの平均貸出回数を第2表で見ると、貸出があった図書（「貸出あり」）1冊あたりの平均貸出回数では、76（音楽）が3.1回に対し、3（社会科学）および76以外（音楽以外の芸術）がともに1.6回であることが確認できる。他の主題分野を見ると、4（自然科学）が3.3回、5（技術）が3回と76（音楽）と同水準となっている。4（自然科学）については、前節で確認したように貸出率も高く、また1冊あたりの平均貸出回数も76（音楽）に近いので、76（音楽）と同様に利用が多い主題分野とも考えられる。これに対し5（技術）は、個々の図書の内容（主題）に大きく影響を受けた可能性がある。5（技術）に関しては、「貸出あり」1冊あたりの平均貸出回数は多いが、貸出率が低いため受入冊数1冊あたりの平均貸出回数は0.1回しかない。これはつまり、貸出が特定の図書に集中していることを意味する。これについては、次節にて個々の「貸出あり」図書のタイトルを確認する。

第2表 貸出回数（合計）

	NDC第1次区分											合計
	0 (総記)	1 (哲学)	2 (歴史)	3 (社会科学)	4 (自然科学)	5 (技術)	6 (産業)	7 (芸術)		8 (言語)	9 (文学)	
								76 (音楽)	76以外			
貸出回数	14	3	13	63	40	9	2	649	64	30	52	939
1冊あたり 平均回数①	1.2	1	1.6	1.6	3.3	3	1	3.1	1.6	2.3	1.6	2.5
1冊あたり 平均回数②	0.3	0.1	0.1	0.2	1.6	0.1	0.1	1.7	0.3	1.5	0.6	0.7

※ 1冊あたり平均回数①は貸出回数を第1表の「貸出あり」の冊数で除したもので、②は貸出回数を同「合計」の冊数で除したもの。

4. 3. 貸出回数（個別）

第3表は、各主題分野の貸出回数ごとの冊数を示したものである。最多回数は16回（1冊）で、以降は15回（1冊）、13回（2冊）、12回（2冊）、11回（2冊）と続く。これらの主題分野はすべて76（音楽）である。S大学において76（音楽）の貸出が多いのは当然の結果であるが、特に貸出が多かった貸出回数10回以上の図書について、個々のタイトルを確認してみたい（第4表参照）。まず、貸出回数16

回（1冊）と15回（1冊）を見ると、いずれも音楽に関する図書である。S大学の創立者は声楽家であり、現在に至るまで、声楽やオペラは同大学の教育・研究領域の中で重要な位置を占めている。また声楽は副専攻¹²の履修者も多い。これらのことから、声楽やオペラに関する図書の貸出回数が多いことは容易に理解できる。以下、貸出回数10回から13回を見ても、オペラ、ピアノ、音楽療法など、ほとんどが専攻に直結する図書である。

第3表 貸出回数（個別）

貸出回数	NDC第1次区分										合計	
	0 (総記)	1 (哲学)	2 (歴史)	3 (社会科学)	4 (自然科学)	5 (技術)	6 (産業)	7 (芸術)		8 (言語)		9 (文学)
								76 (音楽)	76以外			
16回								1				1
15回								1				1
13回								2				2
12回								2				2
11回								2				2
10回				1				3				4
9回								3				3
8回								3	1		1	5
7回					1			6		2	1	10
6回					1			9				10
5回					1	1		8				10
4回					1			20	1		1	23
3回			1	2	3	1		32	4	1		44
2回	2		3	11	4			37	6	3	4	70
1回	10	3	4	25	1	1	2	79	28	7	25	185
合計	12	3	8	39	12	3	2	208	40	13	32	372

第4表 貸出回数10回以上の個別タイトル（76（音楽））

貸出回数	タイトル
16回	『うまく歌える「からだ」のつかいかた：ソマティクスから導いた新声楽教本』
15回	『歌唱の仕組み：その体系と学び方』
13回	『モーツァルト演奏法と解釈』
	『感覚統合を活かして子どもを伸ばす！音楽療法：苦手に寄り添う楽しい音楽活動』
12回	『Cosy fan tutte ossia la scuole degli amanti = 女性は大抵こんなもの』※
	『ラフマニノフ：生涯、作品、録音』
11回	『ミスタッチを恐れるな：伸び悩みの壁を越え、演奏に生命力を取り戻す』
	『ファルスタッフ』※
10回	『フランツ・リストはなぜ女たちを失神させたのか』
	『シューマンの結婚：語られなかった真実』
	『教養としてのバッハ：生涯・時代・音楽を学ぶ14講』

※ 『Cosy fan tutte（以下略）』および『ファルスタッフ』はいずれもオペラの対訳

一方、76（音楽）以外を見ると、貸出回数が最も多かったのは3（社会科学）の10回（1冊）である。3（社会科学）においてこれに続くのは貸出回数3回（2冊）であり、貸出回数10回は際立っている。しかしながら、当該図書についてはNDCでは3（社会科学）に分類されているが、第5表で確認すると分かるように、利用者の立場からみれば「音楽」に分類されるべき図書である。

次に続くのは、76以外（音楽以外の芸術）と9（文学）の8回（それぞれ1冊）である。このうち76以外（音楽以外の芸術）の1冊は、3（社会科学）ほどではないが、当該主題分野内での他の図書に比べて貸出回数が特に多い。この図書についてもタイトルを確認すると、音楽と美術に関わる内容であり、さらに著者は「音楽評論家」に属する人物である。このことから、利用者の観点から当該図書の

第5表 貸出回数3回以上の個別タイトル（76（音楽）以外）

貸出回数	タイトル（NDC区分）
10回	『「音大卒」の戦い方』(3)
8回	『音楽で楽しむ名画：カラー版：フェルメールからシャガールまで』(76以外)
	『小説言の葉の庭』(9)
7回	『アレクサンダー・テクニーク入門：能力を出しきるからだの使い方』(4)
	『シェイクスピアの作品研究：戯曲と詩、音楽』(9)
	『よくわかる卒論の書き方』(8)
	『これならわかるイタリア語文法：入門から上級まで』(8)
6回	『心と体の不調を解消するアレクサンダー・テクニーク入門』(4)
5回	『声の悩みを解決する本：音声専門医35年：「文殊の知恵」のひとりごと』(4)
	『ハンドブック・オブ・レコーディング・エンジニアリング』(5)
4回	『からだを解き放つアレクサンダー・テクニーク：体・心・魂が覚醒する』(4)
	『はじめての演技トレーニング：レッスンのヒント83』(76以外)
	『小説君の名は。』(9)
3回	『はじめて学ぶイタリアの歴史と文化』(2)
	『企業を文化で語る。：メセナ再考：考え方から現状まで』(3)
	『創造都市への展望：都市の文化政策とまちづくり』(3)
	『実践アレクサンダー・テクニーク：自分を生かす技術』(4)
	『フェルデンクライス・メソッド：簡単な動きをとおした神経回路(ニューロネット)のチューニング』(4)
	『プレゼントモーメント：精神療法と日常生活における現在の瞬間』(4)
	『マイクロホンバイブル』(5)
	『演出家の誕生：演劇の近代とその変遷』(76以外)
	『俳優の仕事：俳優教育システム』(76以外)
	『21世紀俳優のための21キーワード：現代ヨーロッパの演劇トレーニング』(76以外)
	『芸術と経営：Art management：理論・実務・リサーチ』(76以外)
	『すぐに役立つポップス英会話』(8)

主題を判断すれば、「美術」よりも「音楽」の方がふさわしいであろう。一方、9（文学）の1冊については、特に言及すべきことは無い。

貸出回数が7回になると、4（自然科学）に該当する図書が現れてくる。前節で述べたように、4（自然科学）の貸出率は76（音楽）に次いで高く、さらに1冊あたりの平均貸出回数も76（音楽）に匹敵しており、この結果を見る限りでは、76（音楽）と同様に利用が多い主題分野となっている。ここでは、その理由を探るべく個別のタイトルを確認する。まずは当該分野の貸出回数（個別）を第3表で確認すると、3（社会科学）や76以外（音楽以外の芸術）のように、極端に貸出回数が多い図書は存在しないが、貸出回数の多い図書が他の主題に比べて多い。例えば貸出回数4回以上の冊数は4冊、3回以上の図書は7冊で、いずれも76（音楽）に次ぐ冊数である。そこで次に、これら貸出回数の多い図書のタイトルを第5表で確認すると、貸出回数4回以上の図書4冊のうち3冊が「アレクサンダー・テクニク」に関する図書であることが分かる。「アレクサンダー・テクニク」は身体の不必要な緊張を解く技法であり、S大学では、演奏と身体関係を学ぶ特定の授業において「アレクサンダー・テクニク」を取り入れている。この科目の履修者は多く、この影響で4（自然科学）全体の貸出回数が大きく増えたのだと思われる。なお、貸出回数4回以上の残りの1冊は、「声」に関するもので、声楽との関連性が高い。

続いて、前節にて貸出が特定の図書に集中していることが確認された5（技術）について、個別のタイトルを見てみる。まず貸出回数が最多（5回）の図書は、レコーディング技術に関するものである。これに次ぐ貸出回数3回の図書は、マイクroフォンに関するものであり、レコーディング技術にも関係がある内容である。S大学には、ポピュラー音楽や音楽プロデュース¹³を専攻するコースがあり、ここでは「レコーディング」が主要な要素の1つとなっている。

その他の貸出回数が多い図書としては、8（言語）および9（文学）における貸出回数7回の図書3冊がある。これらに関しては、9（文学）のうちの1冊において一部に音楽に関わる文章があることを除いては特に目立った特徴は無い。

4. 4. 未貸出図書

最後に、未貸出図書の個別タイトルを確認したい。まずは76（音楽）である。76（音楽）については、貸出があった図書208冊に対して、未貸出図書が164冊で、その貸出率は前述のとおり55.9%である。受入冊数が他の主題分野より多いため、NDC第3次区分¹⁴に細区分した上で個別タイトルを確認することとする。細区分した結果（第6表上段）を見ると、主題分野により貸出率にばらつきがあることが分かる。貸出率が76（音楽）全体の55.9%から大きく下がっているのが、765（邦楽）および766（ポピュラー音楽）である。765（邦楽）についてはS大学に専攻（副専攻も含めて）が無いための結果だと思われるが、766（ポピュラー音楽）の貸出率が低い理由は不明である。これらに属する個々のタイトルを見ても、「貸出あり」と「貸出なし」を分ける要因を確認することはできなかった。反対に55.9%から10%以上高い貸出率を示したのが761（音楽理論および実技一般）であった。これについて個々のタイトルを確認すると、未貸出図書5冊のうち3冊が洋書であった。洋書の貸出率が低いことは前述のとおりであり、未貸出の洋書74冊のうち63冊が76（音楽）に含まれている。そこで、洋書を除外してあらためて貸出率を算出したものが第6表の下段である。もともと貸出率が低い765（邦楽）と766（ポピュラー音楽）は、洋書率も低いため、765（邦楽）の貸出率は全く変わらず、766（ポピュラー音楽）はわずかに上昇したのみである。一方、これら以外はすべて65%以上となり、特に761（音楽理論および実技一般）は83.3%、764（楽器、器楽）は76.2%に達する。

第6表 貸出の有無（音楽分野）

		NDC第3次区分							合計
		760 (音楽)	761 (音楽理論および実技一般)	762 (音楽史)	763 (声楽)	764 (楽器、器楽)	765 (邦楽)	766 (ポピュラー音楽)	
洋書含む	貸出あり	54	11	73	42	18	1	9	208
	貸出なし	40	5	56	27	12	5	19	164
	合計	94	16	129	69	30	6	28	372
	貸出率	57.4%	68.7%	56.6%	60.9%	60.0%	16.7%	32.1%	55.9%
	未貸出率	42.6%	31.3%	43.4%	39.1%	40.0%	83.3%	67.9%	44.1%
和書のみ	貸出あり	52	10	67	39	16	1	9	194
	貸出なし	28	2	24	21	5	5	16	101
	合計	80	12	91	60	21	6	25	295
	貸出率	65.0%	83.3%	73.6%	65.0%	76.2%	16.7%	36.0%	65.8%
	未貸出率	35.0%	16.7%	26.4%	35.0%	23.8%	83.3%	64.0%	34.2%

※ 「貸出率」は、主題（NDCの区分）ごとの合計冊数に占める「貸出あり」冊数の割合を表す。

※ 「未貸出率」は、主題（NDCの区分）ごとの合計冊数に占める「貸出なし」冊数の割合を表す。

※ S大学附属図書館では、NDC76（音楽）の第3次区分を独自に設定しているため、本来のNDCの区分とは異なる。

第7表 76（音楽）における「貸出あり」と「貸出なし」(未貸出図書)のタイトル比較（※洋書を除く）

761（音楽理論および実技一般）	
「貸出あり」	「貸出なし」(未貸出図書)
『本番に強くなる！：演奏者の必勝メンタルトレーニング』	『ウルトラセブン・スコア・リーディング：冬木透の自筆楽譜で読み解くウルトラセブン最終回』
『ピアニストの筋肉と奏法』	『オーケストラ指揮者の多元的知性研究：場のリーダーシップに関するメタ・フレームワークの構築を通して』
『名曲の設計図：音楽の秘密を形式からひも解く』	
『究極の読譜術：こころに響く演奏のために』	
『名曲の完成図：楽曲の分類から表現に導く』	
『学ぼう指揮法Step by Step：わらべ歌からシンフォニーまで』	
『ピアノのための楽式論』	
『フーガ書法：パリ音楽院の方式による』	
『バジル先生の吹奏楽部員のためのココロとカラダの相談室：今すぐできるよくわかるアレクサンダー・テクニーク』	
『音楽家の手：臨床ガイド』	
764（楽器、器楽）	
「貸出あり」	「貸出なし」(未貸出図書)
『ミスタッチを恐れるな：伸び悩みの壁を越え、演奏に生命力を取り戻す』	『日本のヴィンテージ・ギター：メイド・イン・ジャパンの銘器たち』
『ピアノ図鑑：歴史、構造、世界の銘器』	『未来に羽ばたくピアノ教育：ペース博士が伝えたかったこと』
『目からウロコのピアノ指導法：譜読みが苦手…は克服できる！：先生も生徒も楽しいレッスン』	『実践★五弦バンジョー教本』
『知って得するエディション講座』	『ピアノの誕生：楽器の向こうに「近代」が見える』
『「音楽的」なピアノ演奏のヒント：豊かなファンタジーとイメージ作り』	『癒しの楽器パイプオルガンと政治』
『ピアノ・テクニクの科学：プロフェッサー・ヤンケのピアノ・メソッド』	
『これでOK！打楽器メンテナンス：コンサートパーカッションのチューニングと調整』	
『パイプオルガン入門：見て聴いて触って楽しむガイド』	
『ピアノの演奏様式』	
『「バイエル」原典探訪：知られざる自筆譜・初版譜の諸相』	
『ピアノ教室の法則術：成功への7つの極意』	
『楽器万華鏡：世界の美しき音の器たち』	
『ピアノ：国立音楽大学楽器学資料館所蔵目録』	
『楽器学入門：写真でわかる！楽器の歴史』	
『みるみる音が変わる！ヴァイオリン骨体操』	
『もっとウキウキピアノ・エレクトーン上達法』	

76（音楽）に関して、洋書を除外した状態で、あらためて個々のタイトルを確認する。ここでは、上で示したように特に貸出率が高い761（音楽理論および実技一般）および764（楽器、器楽）について見る（第7表参照）。最初に761（音楽理論および実技一般）について、「貸出あり」のタイトル見れば、「ピアノ」や「指揮法」、「読譜術」、「演奏者のメンタル」といった演奏に関わるもの、「楽式」(楽曲形式)や「フーガ¹⁵」といった理論に関わるもの、前述の「アレクサンダー・テクニーク」に関わるものなど、その内容は授業に直接関わるものである。なお、「貸出あり」の中の1冊『音楽家の手：臨床ガイド』は、本来NDCでは「医学」に分類される内容であるが、利用の便宜上「音楽」に分類したのだと思われる。次に「貸出なし」の2冊を見ると、確かに「楽譜」や「指揮者」といった音楽に関わる言葉が含まれているが、『ウルトラセブン・スコア・リーディング：冬木透の自筆楽譜で読み解くウルトラセブン最終回』はNDCでは「テレビ演劇」に分類されてもよい¹⁶のものであり、『オーケストラ指揮者の多元的知性研究：場のリーダーシップに関するメタ・フレームワークの構築を通して』は、タイトルから判断すると「音楽」というよりも「社会学」の要素が強い。この2冊が「音楽の図書」を求める利用者のニーズを満たすのかは疑問である。さらに付け加えると、20歳前後の利用者に、1967年から1968年にかけてテレビ放映された「ウルトラセブン」に対する利用ニーズがあるとは思えない。

続いて764（楽器、器楽）について「貸出あり」と「貸出なし」のタイトルを比較すると、両者ともに「ピアノ」あるいは「パイプオルガン」が半数以上のタイトルに含まれており、761（音楽理論および実技一般）に見られたような明確な違いは認められない。しかしながら、個々のタイトルを詳細に確認すると、両者の違いが明らかになってくる。「ピアノ」や「パイプオルガン」が含まれるタイトルについて言えば、「貸出あり」では大部分が演奏法や

楽器紹介に関する内容であるのに対し、「貸出なし」では、演奏法に関わるタイトルは含まれておらず、また『癒しの楽器 パイプオルガンと政治』は地方行政に関わる内容であり、NDCでは本来3（社会科学）に分類されるべきものである¹⁷。「ピアノ」や「パイプオルガン」以外の楽器については、「貸出あり」では「ヴァイオリン」と「打楽器」が、「貸出なし」では「ギター」と「バンジョー」がタイトルに含まれている。まず楽器の種別に注目すると、S大学には「バンジョー」を専攻するコースは存在しない。次に内容に注目すると、「貸出あり」の2タイトルは、いずれも広い意味で演奏に関わるものである。一方「貸出なし」の「ギター」を含むタイトルは楽器紹介に関わる内容であるが、「ヴィンテージ・ギター」とあるように、数十年前の楽器が対象となっている。

その他については、全体的な特徴は見られないが、いくつかの細かい特徴を見ることはできる。762（音楽史）では、日本音楽史に関する図書が「貸出あり」1冊で「貸出なし」3冊、東洋・アジア音楽史が「貸出あり」1冊で「貸出なし」3冊となっている。また763（声楽）では、舞踊・バレエが「貸出あり」5冊で「貸出なし」6冊、唱歌が「貸出あり」0冊で「貸出なし」4冊となっている。これらは、貸出率が65%を超える主題分野の中では特に貸出率が低い、つまり未貸出率が高い主題である。

76（音楽）以外の主題分野に関しては、貸出率が低い分野や1冊あたりの平均貸出回数が少ない分野は、利用ニーズが低い分野だと思われるので、個々のタイトルを確認する必要性は低い。一方で、4（自然科学）や8（言語）のように、貸出率が高く1冊あたりの平均貸出回数も多い分野については、個々のタイトルが貸出の有無を左右する可能性があり、未貸出図書には何らかの特徴があると思われる。そこで、これら2分野について個別タイトルを確認したい。

第8表 4 (自然科学) および8 (言語) における「貸出あり」と「貸出なし」(未貸出図書) のタイトル比較
(※洋書を除く)

4 (自然科学)	
「貸出あり」	「貸出なし」(未貸出図書)
『アレクサンダー・テクニック入門：能力を出しきるからだの使い方』	『自然の秘密をあばいた人びと』
『心と体の不調を解消するアレクサンダー・テクニック入門』	『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか?』
『声の悩みを解決する本：音声専門医35年：「文殊の知恵」のひとりごと』	『科学技術政策：その体系化への試み』
『からだを解き放つアレクサンダー・テクニック：体・心・魂が覚醒する』	『水族館のはなし』
『実践アレクサンダー・テクニック：自分を生かす技術』	『日本の渚：失われゆく海辺の自然』
『フェルデンクライス・メソッド：簡単な動きをとおした神経回路（ニューロネット）のチューニング』	『博物学の欲望：リンネと時代精神』
『プレゼントモーメント：精神療法と日常生活における現在の瞬間』	『トゲウオのいる川：淡水の生態系を守る』
『ミューズの病跡学』	『戦う動物園：旭山動物園と到津の森公園の物語』
『図解やさしくわかる言語聴覚障害』	『水族館への招待：魚と人と海』
『フェルデンクライス・メソッド入門：力みを手放す、体の学習法』	『モンゴロイドの道』
『ポップスで精神医学：大衆音楽を“診る”ための18の断章』	『進化とは何か』
『音と生活』	『日本人の骨とルーツ』
8 (言語)	
「貸出あり」	「貸出なし」(未貸出図書)
『よくわかる卒論の書き方』	『学生による学生のためのダメレポート脱出法』
『NHK出版これならわかるイタリア語文法：入門から上級まで』	『現代フランス広文典』
『すぐに役立つポップス英会話』	『パターン活用やさしい英語スピーチ』
『大学生のためのレポート・論文術』	『起きてから寝るまで表現550』
『しっかり身につく中級ドイツ語トレーニングブック：文を違うパターンで置きかえる練習』	『社会人の英単語：Your wordmates』
『英語で読むオペラ座の怪人』	『JAPAN：日本語』
『論文の教室：レポートから卒論まで』	『The fifth wheel：齋藤辞典のことなど』
『フランス語文法総解説』	
『なぜ外国語を身につけるのは難しいのか：「バイリンガルを科学する」言語心理学』	
『英語を使いこなすための実践的学習法：my English のすすめ』	
『言語起源論：旋律と音楽的模倣について』	
『大学1年生のための伝わるレポートの書き方』	
『NITOBE 武士道を英語で読む：新渡戸稲造』	

両分野の個別タイトルは第8表のとおりである。4（自然科学）に関しては、「貸出あり」のうち上から4冊目までのタイトルは確認済なので、5冊目以降を確認することとする。まず5冊目は前述の「アレクサンダー・テクニーク」に関するものである。その他に「フェルデンクライス・メソッド」に関わるタイトルが2冊あるが、これは「アレクサンダー・テクニーク」に内容が類似している。残る5冊のうち3冊は音楽または音に関する内容である。これに対し「貸出なし」を見ると、音楽や音、「アレクサンダー・テクニーク」に関するタイトルは1冊も含まれておらず、動物（生物）や人類に関わるものが12冊中9冊を占めている¹⁸。

一方8（言語）では、「貸出あり」13冊中2冊は明らかに音楽に関わる内容であり、他の1冊（『英語で読むオペラ座の怪人』）も間接的に音楽に関係があると考えられる¹⁹。それ以外は、論文やレポート執筆に関わるタイトルが4冊で、残る6冊は外国語学習書である。これに対し「貸出なし」には音楽に関わるタイトルは含まれていないが、レポート執筆に関わるタイトルが1冊、外国語学習書が4冊含まれており、この点では「貸出あり」との違いが見られない。残りの2冊については、1冊が日本語学習書、もう1冊が随筆に分類されるものであり、これらは「貸出あり」に含まれてないタイトルである。

5. 考察

5. 1. 先行研究との未貸出率の比較

ここでは未貸出率に関して先行研究との比較を行う。比較の対象は、本稿と同じ条件での未貸出率のデータが提供されている岸田ら⁶とする。岸田ら⁶が調査した2つの大学図書館における調査対象の図書冊数は、A大学が9,748冊、B大学が11,835冊であり、本稿の調査対象であるS大学の1,365冊の7.1倍

および8.7倍の規模である。また、1冊あたりの平均貸出回数はS大学の0.7冊に対して、A大学は1.0冊、B大学は0.7冊である。

これら3大学の主題分野ごとの未貸出率は第9表のとおりである。なお、先行研究では76（音楽）単独の未貸出率は示されていないため、S大学もこれに合わせた。岸田ら⁶の調査では、A大学とB大学ともに最も未貸出率が高いのは0（総記）であるが、S大学においては特に高くはなく、ほぼ中間の位置（順位）にある。S大学で最も未貸出率が高いのは5（技術）であり、これはA大学では2番目に、B大学では3番目に未貸出率が低く、S大学との差が最も大きい主題分野となっている。2番目に未貸出率が高いのはA大学、B大学、S大学いずれも2（歴史）であり共通している。S大学で未貸出率が3番目に高い6（産業）は、A大学、B大学ともに4番目であり、ほぼ同様である。

A大学で最も未貸出率が低いのは4（自然科学）であり、B大学でも2番目に低い。この状況はS大学も同様で、未貸出率は2番目に低い。一方、B大学で最も未貸出率が低いのは8（言語）であるが、A大学では特に低いとは言えず平均値に近い。これに対しS大学ではB大学と同様に8（言語）の未貸出率は最も低い。8（言語）のように、A大学とB大学の間では未貸出率の順位に差はあるが、そのどちらかとS大学の順位が一致するものには、その他に3（社会科学）がある。

これに対し、A大学やB大学に比べてS大学において未貸出率の順位が低い主題分野には7（芸術）と9（文学）がある。7（芸術）にはS大学において最も貸出率が高い76（音楽）が含まれているため、必然的に未貸出率は低くなる。一方9（文学）に関しては、前章にて個別タイトルを確認したが、未貸出率が低い理由は不明である。7（芸術）や9（文学）とは逆に、A大学、B大学に比べてS大学にお

第9表 先行研究との未貸出率の比較

	全体	NDC第1次区分										標準偏差	受入冊数 (割合)との 相関係数
		0 (総記)	1 (哲学)	2 (歴史)	3 (社会科学)	4 (自然科学)	5 (技術)	6 (産業)	7 (芸術)	8 (言語)	9 (文学)		
S大学	72.7%	78.2%	91.7%	94.7%	85.3%	52.0%	95.2%	93.5%	60.4%	35.0%	65.2%	19.9%	-0.09
岸田ら (A大学)	58.6%	75.7%	60.2%	73.7%	53.2%	41.7%	51.5%	64.6%	65.8%	57.1%	64.1%	9.8%	-0.30
岸田ら (B大学)	70.8%	88.1%	65.5%	79.8%	66.7%	58.1%	63.4%	72.5%	66.1%	49.0%	74.3%	10.5%	0.33

いて未貸出率の順位が高いのが1（哲学）である。1（哲学）については、S大学において3冊の図書が各1回貸し出されたのみであり、個別タイトルを確認しても貸し出された図書の傾向はつかめない。

全般的に見ると、S大学はA大学やB大学に比べて主題分野間の未貸出率のばらつきが大きい。S大学は、76（音楽）を含む7（芸術）の受入冊数が受入冊数全体の45.9%を占めており、これが未貸出率のばらつきに影響を与えていることが考えられる。しかしながら、受入冊数の割合と未貸出率の相関関係を見ると、S大学はほとんど相関が無く、A大学は弱い負の相関が、B大学は弱い正の相関が見られ、3大学に共通する傾向は認められない。

5. 2. 未貸出図書の特徴

5. 2. 1. 主題分野

前述のとおりS大学の未貸出率は平均72.7%である。これは他大学と比べて特に高い割合とは言えない。ただし主題分野間のばらつきが大きいため、未貸出率が極めて高い分野が存在する。岸田ら⁶の調査において最も未貸出率が高かったのは、B大学における0（総記）の88.1%であり、80%を超える分野はこの1分野のみである。一方、S大学においてはこの88.1%を超える分野が4分野あり、いずれも90%を超えている。具体的には、1（哲学）が91.7%、2（歴史）が94.7%、5（技術）が95.2%、6（産業）が93.5%である。これら4分野については、大部分が未貸出図書となる。

5. 2. 2. 個別タイトル

前章において、貸出があった図書および未貸出図書について、主題分野を限定した上で個別タイトルを確認した結果、いくつかの特徴が浮かび上がった。ここではその結果に対し、未貸出図書の特徴という観点から考察を加えることとする。

前章で未貸出図書の個別タイトルを確認した主題分野は、76（音楽）、4（自然科学）、8（言語）の3分野であった。これらの分野は貸出率が高く、また1冊あたりの平均貸出回数も多い分野なので、そのような分野における未貸出図書には未貸出である何らかの理由（特徴）があると思われる。

まず76（音楽）については、受入冊数が多いため、NDC第3次区分のレベルで個別タイトルを確認した。はじめに主題分野ごとの未貸出率を見ると、765（邦楽）が83.3%で特に高い。この値は前項で見た未貸出率が90%を超える4分野には及ばないが、

これは765（邦楽）の受入冊数（分母）が小さいことが影響している。765（邦楽）の受入冊数は6冊でそのうち1冊が貸し出されているが、仮に受入冊数が10冊になったとしても、S大学に邦楽の専攻が無いことを考えれば、貸出が2冊に増えるとは思えない。したがって未貸出率は前項で挙げた4分野と同水準ではないかと思われる。個別タイトルに関しては、761（音楽理論および実技一般）において、未貸出図書の特徴が明確に表れていた。同分野では、貸出があった図書は演奏や理論など授業に直接関わるものであったのに対し、未貸出図書にはそのような図書は含まれておらず、音楽というよりも他分野（「テレビ演劇」、「社会学」）の要素が強い内容であった。さらに利用者（大学生）の年齢層にはなじみの無い内容も含まれていた。なお、「音楽に分類されているが他分野の要素が強いもの」と「他分野に分類されているが音楽の要素が強いもの」は似て非なるものである。761（音楽理論および実技一般）に見られた特徴は、明確ではないにしても、764（楽器、器楽）でも確認することができた。これに加えて、S大学において専攻が無い楽器に関する図書の貸出は無いという特徴も見られた。その他の分野では、763（声楽）において「唱歌」に関わる図書の貸出が無かったことが挙げられる。

続いて4（自然科学）および8（言語）においては、音楽あるいは音楽に関連するタイトルが「貸出あり」には複数含まれているが、「貸出なし」には全く含まれていない。これに加えて4（自然科学）では、ある特定の授業に関わるタイトルが「貸出あり」の半数を占めているが「貸出なし」には1つも含まれていない。これとは逆に「貸出なし」にのみ含まれているタイトルに関しては、4（自然科学）においては動物（生物）や人類に関わるものが「貸出なし」の3分の2以上を占めている。以上は未貸出図書の特徴と言って良いであろう。これに対し8（言語）では、日本語学習書や随筆が「貸出なし」にのみ含まれているが、各1冊だけであり、これを未貸出図書の特徴とは言い切れない。

貸出があった図書1冊あたりの平均貸出回数が上記3分野に匹敵するのが5（技術）である。5（技術）については、前述のとおり未貸出率が非常に高いが、一方で一部の図書が複数回貸し出されている。これらはレコーディング技術に関するものであり、未貸出図書には1冊も含まれていない。なお、「レコーディング」が音楽関連分野であることは前に述べたとおりである。これらのことから考えると、音

楽関連分野であるか否かが貸出を左右すると言えるかもしれない。

残る主題分野については、まず3（社会科学）および76以外（音楽以外の芸術）には極端に貸出回数が多い音楽関連の図書が存在するが、それぞれ1冊のみであり、例外的な図書であると捉えるべきであろう。また0（総記）および9（文学）は、貸出率がそれぞれ4番目、5番目に高い分野であるが、貸出があった図書および未貸出図書に目立つ特徴を確認することができなかった。

6. 結論

本稿では、小規模単科大学の1つであるS大学の附属図書館を対象として、受入年度の翌年度の貸出状況を基に未貸出図書の特徴を探った。その結果、未貸出率については、全般的には先行研究と同水準であったが、NDC第1次区分により主題分野ごとに見た場合、主題分野間のばらつきが先行研究に比べて大きいことが分かった。未貸出率が低い（つまり貸出率が高い）分野は、S大学の専門分野である76（音楽）のほか、8（言語）、4（自然科学）であった。76（音楽）については当然の結果であるが、8（言語）および4（自然科学）については先行研究においても未貸出率が低く、目立つ特徴は無かった。一方、①未貸出率が極めて高い分野は、1（哲学）、2（歴史）、5（技術）、6（産業）の4分野で、その未貸出率は91.7%から95.2%に及ぶ。この中でも5（技術）は、先行研究においては未貸出率が低い分野であり、この分野の未貸出率が高いこと自体がS大学の特徴と言える。76（音楽）については細区分した結果、765（邦楽）が上記4分野と同様に未貸出率が特に高い分野であることが分かった。

未貸出図書の特徴を個別タイトルで見た場合、主題分野固有の特徴もあるが全般的に見るならば、まず②「音楽関連ではないこと」が挙げられる。ここで言う「音楽関連」とは、利用者の立場から考えた場合である。例えば、レコーディング技術はポピュラー音楽を専攻する学生にとっては「音楽関連」と言えよう。逆に76（音楽）であっても、他分野の要素が強いタイトルの場合は「音楽関連」とは言えないだろう。次に③「履修者の多い授業に直接的な関連を持たないこと」である。これは4（自然科学）において、貸出があった図書の半数をある特定の授業関連の図書が占めていたことを逆説的に表現しているが、76（音楽）において言えば、授業に直接的

な関連が無い楽器（「バンジョー」など）や音楽ジャンル（「唱歌」など）がこれに当てはまる。なお、授業に直接的に関連を持っていても、レポート執筆に関わるものや外国語学習のような汎用性の高い内容については③は当てはまらない。最後は④「利用者の年齢層になじみがないこと」であるが、これに関しては事例が少ないため、他の特徴とは区別しなければならないかもしれない。

以上、S大学附属図書館における未貸出図書の特徴を4つ挙げたが、これらの特徴はある程度の一般化が可能だと思われる。つまり、小規模単科大学の附属図書館では、S大学と同様に「専門分野に関連しないこと」が未貸出図書の特徴になり得るであろう。その結果、小規模であることと相まって主題分野間の未貸出率のばらつきが大きくなり、極めて未貸出率が高い分野が出てくることも十分に考えられる。また単科大学は総合大学に比べて全学的な共通科目あるいはそれに近い科目（つまり大部分の学生が履修する科目）を開講しやすくなるため、場合によってはS大学の4（自然科学）のように、当該授業関連の図書に貸出が集中してそれ以外がほぼ貸し出されないような状況も起こり得る。

今回の調査では経年的変化は考慮しなかった。これは、経年的変化を除外した状態での未貸出図書の特徴を確認するためであった。一方で先行研究では未貸出図書の割合が経年的に減少することが示されているので、今後は経年的変化に着目して調査を行いたい。

注・引用文献

- 1 日本図書館協会. “日本の図書館統計”. 日本図書館協会. <http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx>, (参照 2020-06-27).
- 2 岸田和明, 逸村裕, 原田隆史, 高山正也, 小川治之. 大学図書館における図書の館外貸出と館内利用との量的関係. 第38回日本図書館学会研究発表大会要綱. 1990, p. 53-56.
- 3 “規模別大学一覧表 (平成30年5月1日現在)”. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/06/28/1280065_17.pdf, (参照 2020-07-01).
- 4 例えば以下などが挙げられる。
山田周治. 館外貸出データに見る利用傾向:蔵書回転率の分析. 大学図書館研究. 2003, no. 69, p. 27-33.

松井朗, 磯野肇. 「蔵書回転率」と「蔵書貸出率」を指標とする貸出データの分析調査: 奈良大学における図書館資料利用の傾向について. 奈良大学紀要. 2006, no. 34, p.177-190.

星野雅英, 渡邊真由美, 風巻利夫, 原香寿子. 東京大学総合図書館における入館・貸出統計データ分析の試み: 中央図書館としての役割を考えるために. 大学図書館研究. 2008, vol. 82, p. 1-11.

- 5 鬼頭當子, 黒沢公人. 全面開架制度の図書館に於ける未貸出図書の分析. 私立大学図書館協会会報. 1986, no. 87, p.67-99.
- 6 岸田和明, 逸村裕, 高山正也. 大学図書館における館外貸出データの分析手法: オブソレッセンスと貸出頻度分布の分析を中心として. 図書館研究シリーズ. 1994, no. 31, p. 79-127.
- 7 受入年度の翌年度以降の貸出データが分析対象となっているため, たとえ分析対象データでは未貸出であったとしても, 受入年度に貸出があった可能性は否定できない。よって厳密には本稿の未貸出図書の定義に当てはまらないが, 岸田は本稿の定義とほぼ同様の意味でこの語を用いているので, 本稿でもそのままこの語を用いることとした。このことは, 本稿の調査対象であるS大学附属図書館の貸出データにも当てはまる。
- 8 鬼頭らの対象とした大学は厳密に言えば総合大学ではないが, いわゆる文系と理系を総合的に含むという意味で, ここでは総合大学とした。
- 9 これは, 利用者の中心である学生の場合の規則であり, 教職員の場合は視聴覚資料の館外貸出も可能である。
- 10 S大学附属図書館では, 教員個人研究費により購入され研究室で利用されている資料も図書館の蔵書として登録されているが, ここでは, これらの資料は含まれていない。
- 11 今回のデータでは, 閉架図書55冊のうち館外貸出があったのは1冊のみであった。
- 12 S大学は単一学部であるが, 2つの学科があり, 各学科は多くのコースに分かれている。学生はいずれか1つのコースに属しており, それが主専攻(主科)となる。例えば「声楽コース」は声楽が主専攻(主科)であり, 声楽コースの学生がピアノを履修する場合, ピアノが副専攻(副科)となる。
- 13 S大学では「サウンドプロデュース」と呼んで

いる。

- 14 S大学附属図書館では, NDC76(音楽)の第3次区分を独自に設定しているため, 本来のNDCの区分とは異なる。
- 15 多声音楽の様式(形式)の1つ。
- 16 実際に総合大学や国立国会図書館では「テレビ演劇」に分類されている。一方でS大学のほか音楽・芸術系の大学では音楽に分類されている。
- 17 国立国会図書館においては3(社会科学)に分類されている。
- 18 タイトルから9冊を判断することは難しいかもしれないが, 「貸出なし」の上から4番目から12番目がこれに該当する。
- 19 「オペラ座の怪人」は, フランスの作家ガストン・ルルーによる小説であるが, 同作品を原作とするアンドリュウ・ロイド・ウェバー作曲のミュージカルが有名である。